

自然保護とはなんだろうと考えてみるころがあります。手を加えないで、ただ自然のなりゆきにまかせておくということなのでしょうが？ それならば、トキは絶滅していてもよいということになりそうです。トキの集団が、現在きわめて限られた個体でなりたっているというのを考えるなら、重なる近親交配の結果、いずれ絶滅という運命にたちいたらねばならないはず。そのことは、現在の集団遺伝学の成果がはっきりと証明してくれています。

：

原生林、それはいずれ、消滅する運命にあるのではないのでしょうか。人々に与えられた生命というものがるように、樹木にも限られた生命があるはず。現在の断面だけでもを考えるなら、手を加えない状態で残しておくことに意味があるかも知れません。しかしいずれにしても、それは自然放置ということであって、自然保護というもののほんの一部ではないかと思うのです。自然のままにしておくことは、学術的に重要な価値があるのであって、すべてではないと思うのです。原生林としての景観を、自分達の時代だけのものとしないうで、子や孫またその子にまでもずっと受けつがせてゆきたいとねがうなら、人々は、すくなくとも自然保護を口にする人々は、

その原生林の生態学的本質を知り、理解する必要があるのでしよう。とくに、遺伝学的な原生林の理解を深くしなければいけないと思うのです。

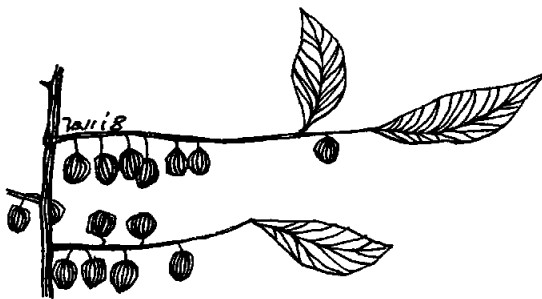
いままでの自然保護が、さわるな、ふれるな式の静的なものであったのにたいして、これからの自然保護は動的であることが必要ではないのでしょうか？ 静的自然保護は、ややもすると自然放置ということに置きかえられていたように思うのです。もちろん、こうした自然保護のあり方がいけないということではないのですが、自然の恩恵に浴したということが国民全体の要求であればあるだけに、自然保護に対しては動的なとらえ方が必要になってくると思うのです。動的、静的というより、積極的、消極的という言葉は置きかえたほうがいいかも知れませんが。

よくみつ子の魂百までといわれますが、自然保護に対する理解のしかたは、幼児のときから培う必要があるのではないのでしょうか。郊外へときにでかけると、よくこんな情景にぶつかります。母親につれられた子供が一生懸命、虫を追いかけています。××ちゃん……それこっち……こっち……あああだめじゃないの、また逃げられた……つかまえたがへたネエ……、それトンボが来た、あつちだ、こつちだ……。こ

れでは、なんのために昆虫採集に来ているのか分かったものではありません。少なくとも、自然を理解するための手段として採集が許されるものであって、何匹つかまえた、何種類とつたということが目的ではないはず。こうした誤った生物を理解させる態度、また、そうした指導性に問題の発端があるのではないのでしょうか。近頃の変遷戦争、それも同じような問題に起因しているように思うのです。

：

自然を美しく、という言葉が森林に公園にあふれています。綺麗にしましょうという立札が必要なら、本来の自然保護というものはなりたないのではないのでしょうか？ 自然というものと、人間との連なりがどういうしくみになっているのかという深い理解があれば、自然保護はだまっいてもなりたつてゆくはず。そのことは、人と人との関係にもつながってゆくとも思うのです。たえずあらゆる意味で、競争の渦の中にまきこまれていくわれわれであつてみれば、たえず相手をけおとすことばかりに心がゆき、そのためには手段をえらばない。また、目玉ばかりギョロギョロさせている気持ちがあるだろうということは分かります。しかしやはりこうした気持が、自然保護をなりたさせない方向へ



鮫 島 惇 一 郎

みちびいてゆかせるのだと思うのです。人が利己的になる社会そのものに問題があるのでしようが、社会を構成しているものが人間である以上、やはり人間性そのものをとりもどすことが、自然保護に連らなつてゆくと思うのです。だから自然保護は、幼児期からの教育からはじめなくてはならないと思うのです。立札をたてることも、現在の社会にあつては必要かも知れません。しかしそれだけに終わるならば、やはり消極的自然保護の域から一步もでるものではないでしょう。

自然保護ということが、どれほど難かしい問題であるかは多くの人々が知っているとおりで、それだけに、あらゆる関連ある問題に、積極的にとりくむ態度が必要だと思ひます。交通戦争の解決のためにも、また大気汚染の問題にしても、宅地造成の問題にしても、原因は同じものだと思うのです。人間が人間らしい英知を働かせるならば、おのずから解決されてゆくのではないでしょう。

森林美学というのがありますが、どうみてもそれは箱庭的感覚、あるいは絵画的感覚からでないように思うのですが、あまりにも表面的な構成にのみ主眼がおかれているように思うのです。森林美学が自然

保護に役立つためには、断面として森林をとらえるのではなく、生態学的に、また集団遺伝学的に、その本質にまで掘りさげるものでなくてはならないように思うのです。その本質、遷移などが構成的美観とあいまつて、はじめて自然保護との連らなりがでてくるように思うのです。

古くから日本人は、自然を愛する民族であるといふことも認めてきたようですが、自分だけのものとして、それを縮刷された自然として所有することよつてのみ自然を愛し得たといふことは、何を意味するのでしょうか？ 経済的に貧しかったといふこともあるかも知れません。しかし一部特殊な階級の人たちの、自然にたいする見方も同様であつたことを考え合わせると、やはり長いあいだ受けつがれてきたわれわれの血の中に、いつか自然にたいする考え方のまちがいがしみつゝいてきているのかも知れません。それだけに、教育ということに重要性がもたれ、自然保護もその原点から出発しなければならぬと思うのです。

そんな古くない時代でありながら、その土地、その土地は、その自然を背景として特長がありました。しかしいま行楽地と行楽地は劃一化され、平均化されているにもかかわらず、訪れる人々の間から不満がでてこないのはどうした理由によるもの

でしょうか？ 一部業者の利潤のみを追求する態度にも問題はありましよう。しかし大切なのは人々の考え方にあると思うのです。人々はそのためにも強くならねばなりません。自然にたいする本来の意味を理解しなくてはならないと思うのです。観光と、行楽と、その言葉がなくなつてはじめて自然保護が可能となつてくるでしょう。観光開発などという言葉が、なんの抵抗もなく受け入れられている人々の心の中に問題があると思うのです。

人間の存在と、自然とは互いに矛盾した問題をもつています。しかし、自然保護はあくまでも人間の存在があつてその意味がでてくる以上、自然保護は自然放置であつてはならないはずで、

話しはあつちこつちに飛び、まとまりがなくなつてしまいましたが、要は自然に対する考え方にあると思うのです。われわれの自然保護にたいする考え方を、あらためて考えなおしてみる必要があると思ひます。静的な自然保護から動的な自然保護へ……また自然放置といふものと、自然保護とは区別しなくてはならないということも……。

(林業試験場北海道支場)

## 自然保護とはなんだろう